

令和 2 年 7 月 8 日現在

機関番号：12606

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2019

課題番号：17K02351

研究課題名（和文）1970年代の日本における生録文化

研究課題名（英文）Namaroku culture in Japan in the 1970s

研究代表者

金子 智太郎（Kaneko, Tomotaro）

東京藝術大学・大学院映像研究科・講師

研究者番号：20572770

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は人が録音技術を通じていかに世界の音を聞いてきたのかを考察するため、1970年代の日本において流行した「生録」という文化に注目し、この文化のなかでいかなる音がつくられてきたのかを検討した。生録とは、当時普及したカセットテープレコーダーなどの音響技術を用いて、さまざまな音の録音を楽しむ文化である。さらに、本研究はこの文化の多様な歴史的背景を調査することで、人々の聴取や創作のありかたがいかに形成されていったのかを理解した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は聴取と録音の関係を生録という戦後日本の音響技術文化の調査を通じて検討した。そして、この文化を音楽、オーディオ、ラジオ、映画、旅行といったさまざまな同時代文化や、戦後日本社会の転換という時代背景と結びつけて理解することができた。本研究のこうした成果は、日本における音響技術の文化史という、音や聴覚をめぐる広範な研究領域が結びつく課題を示唆している。本研究はこの課題の第一歩であるとともに、この課題に取り組むための問題意識や方法論の提示という点でも意義がある。

研究成果の概要（英文）： This study focuses on the Namaroku culture that became popular in Japan in the 1970s to consider ways in which people listened to the worldly sounds with the help of the sound recording technology and examines the kinds of sound produced in this culture. In the Namaroku culture, various sounds were recorded and enjoyed along with the emerging sound technology such as a cassette tape recorder. Additionally, this study understands ways in which the modes of listening and producing sounds were developed by investigating this culture's diverse historical background.

研究分野：美学・芸術学

キーワード：聴覚文化 音響技術 録音 生録 テープレコーダー 日本の1970年代 サウンドスタディーズ 現代美術

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

1. 研究開始当初の背景

聴取と音響技術の関わりをめぐって、これまで日本でも多様なアプローチで研究が進められてきた。近年は英語圏において音や聴取をめぐる学際的動向「サウンド・スタディーズ」がさかんであり、音楽学やメディア論などのさまざまな領域を結びつける研究があらわれている。しかし、日本における特殊な歴史的事例を通じて、当時の人々が音響技術を用いていかに聞き、いかなる音をだしていたのかを検討した研究はまだ少ない。そこで、本研究は1970年代に流行した「生録」文化に注目し、その内実と背景を明らかにすることを通じて、この課題にひとつの回答を示そうとした。

2. 研究の目的

本研究は1970年代の日本における生録文化において、人が録音技術を通じて音をいかに聞き、いかなる音をつくりだしたのかを理解しようとする。そのために、この文化のなかで音や聴覚をめぐっていかなる議論が交わされ、またどのような創作がなされたのかを具体的に調査する必要がある。さらに、本研究は同時代の音楽、オーディオ、マスメディア、ジャーナリズムなど、さまざまな文化や、戦後日本社会のありかたをふまえて、生録という文化がいかに形成されたのかを考察する。

3. 研究の方法

本研究は最終的に次の5つの方法にもとづいて生録文化を検討した。当時のオーディオ雑誌などの文献資料を通じて、生録文化の普及と経緯について明らかにする。生録における聴取のありかたを1970年代の日本における消費社会の動向と比較する。生録における創作のありかたを同時代のラジオやオーディオをめぐる動向と結びつける。「オーディオユニオン録音コンテスト」の記録や、関係者へのインタビューを通じて、生録文化における創作の経緯と背景を明らかにする。生録をめぐる評論のなかでも映画評論家、荻昌弘の議論に注目し、生録と日本映画批評との接続を試みる。加えて、1970年代における美術家による音響技術を用いた作品の研究もこれらと並行して取り組んだ。

4. 研究成果

本研究は先の5つの方法について、いずれもその成果を学会発表または学術論文のかたちで公開した。

(1) 生録の普及と経緯

オーディオ愛好家の録音に対する関心は1960年代後半に、ハイファイステレオの登場とともに次第に高まっていったと考えられる。この関心は当初はプロのミュージシャンによる音楽の演奏の録音に集まっていたが、次第にさまざまな音の録音へと広がった。生録という言葉が使われるようになるのは1970年代前半である。その背景にはオーディオ機器の新しい消費者を求めたオーディオメーカー、販売店、ジャーナリズムなどの戦略があった。生録の流行は1970年代末まで続いた。

(2) 生録における聴取のありかた

生録の対象はミュージシャンによる音楽の演奏からさまざまな音へと拡大した。そして、生録の楽しみは原音の再現の追求から音を記録すること自体の楽しみ、さらに音を創作することの楽しみに移っていった。こうした動向は、戦後日本の高度経済成長が1970年前後に終りをむかえたことで生じた文化の転換のなかに位置づけることができる。1970年代にはそれまでの画一的な消費のありかたが多様化し、共有された目的や複製を重視してきた文化が変化していった。生録とつながりの深い旅行文化にも同様の転換が認められる。

(3) 生録における創作のありかた

1960年代後半にカセットテープレコーダーが登場することで、誰もが録音を手軽に楽しめるようになった。多くの人々がはじめに手がけたのはラジオ放送の録音、「エアチェック」だったと考えられる。1970年ごろのFM放送の本格化によってエアチェックは普及したと考えられるが、この動向の背景には1960年代におけるテレビの普及をふまえたラジオの文化的位置づけの変

化があった。また、エアチェックの普及を後押しした初期の「ラジカセ」には、録音自体の楽しみを強調する諸機能が充実していた。

(4) アマチュア録音コンテストの歴史と背景

オーディオメーカーやジャーナリズム、放送局などが主催し、アマチュアが録音作品を応募する「録音コンテスト」は、8ミリ映画コンテストに倣って1960年代前半から開催されていた。こうしたコンテストは、1970年前後には音楽の録音技術を競ったが、生録文化がさかんになるとともに自由な録音作品を募るようになった。「オーディオユニオン録音コンテスト」はそのような自由なコンテストのなかでもおそらくもっとも長く続いたものだった。その受賞作品の変遷や受賞者の背景から1970年代の録音文化の展開が見てとれる。

(5) 生録をめぐる批評の成立

「オーディオユニオン録音コンテスト」や「ソニー全日本生録コンテスト」の審査員を務めた映画批評家の荻昌弘は、60年代よりオーディオ批評を手がけ、生録文化についても多くの文章を残した。市民がテクノロジーを用いて表現をするという荻の発想の原点は、1950年代末に参加した日本映画のニューヴェルヴァーグ運動にあった。そして、1960年代後半における日本映画の危機や、1970年の大阪万博における映像の実験に対する批評を経て、荻は次第に市民による音づくりという発想を育んでいったと考えられる。

以上の5つの論点に加えて、美術家による音響技術を用いた作品については、作家に当時の作品の再展示を依頼するプロジェクト「日本美術サウンドアーカイヴ」を通じて、鑑賞経験にもとづく研究を進めた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 金子智太郎	4. 巻 12
2. 論文標題 環境芸術以後の日本美術における音響技術 一九七〇年代前半の美共闘世代を中心に	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 表象	6. 最初と最後の頁 169, 183
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 金子智太郎	4. 巻 23
2. 論文標題 一九七〇年代の日本における生録文化 録音の技法と楽しみ	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 カリスタ	6. 最初と最後の頁 84,112
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Tomotaro Kaneko	4. 巻 21
2. 論文標題 Listening to Sound Patterns: Tony Schwartz 's Documentary Recordings	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Aesthetics (Japanese Society for Aesthetics)	6. 最初と最後の頁 138,148
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計8件（うち招待講演 0件/うち国際学会 1件）

1. 発表者名 金子智太郎
2. 発表標題 日本美術サウンドアーカイブの活動、ねらい、今後
3. 学会等名 国際日本文化研究センター
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 金子智太郎
2. 発表標題 録音によるアマチュア創作文化「生録」における批評の意義
3. 学会等名 大衆文化研究プロジェクト総合国際シンポジウム
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 金子智太郎
2. 発表標題 録音の規範と偏差 1970年代の録音紀行から
3. 学会等名 国際日本文化研究センター
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 金子智太郎
2. 発表標題 「エアチェック」の普及と1970年代日本の消費文化
3. 学会等名 日本ポピュラー音楽学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 金子智太郎
2. 発表標題 市民による音づくり 荻昌弘のオーディオ批評
3. 学会等名 国際日本文化研究センター
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Tomoraro Kaneko
2. 発表標題 Making past artworks resound: Japanese Art Sound Archive
3. 学会等名 Media Arts History (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 金子智太郎
2. 発表標題 堀浩哉によるメディアを用いた1970年代の初期作品 演劇との関わりから
3. 学会等名 表象文化論学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 金子智太郎
2. 発表標題 「環境」からの逸脱 1970年代日本の現代美術における音響技術
3. 学会等名 表象文化論学会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

金子智太郎 美学・聴覚文化論 https://tomotarokaneko.com/ 日本美術サウンドアーカイブ https://japaneseartsoundarchive.com/

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----